

企業訪問 循環型最前線レポート

(有) 花丘商事

残飯はもともと高品質の肥料 菜の花プロジェクトは地産地消、 3Rのお手本です

(有) 花丘商事
NPO法人 豊田・加茂菜の花プロジェクト



菜の花プロジェクトをスタート

今回紹介する菜の花プロジェクト会長の梅谷さんは、父の代から残飯養豚、自給農業を営み、その後、昭和61年に(有)花丘商事を設立。同社は食品製造加工工程から出る排水を微生物処理した汚泥をコンポスト化し、高品質の有機肥料の製造に取り組み、会社を安定成長路線に、そして現在は会長に就任。平成19年にはNPO法人としてスタートした「NPO法人 豊田・加茂菜の花プロジェクト」の会長としてご活躍中です。その梅谷勝利さんに循環社会への取り組みを伺いました。



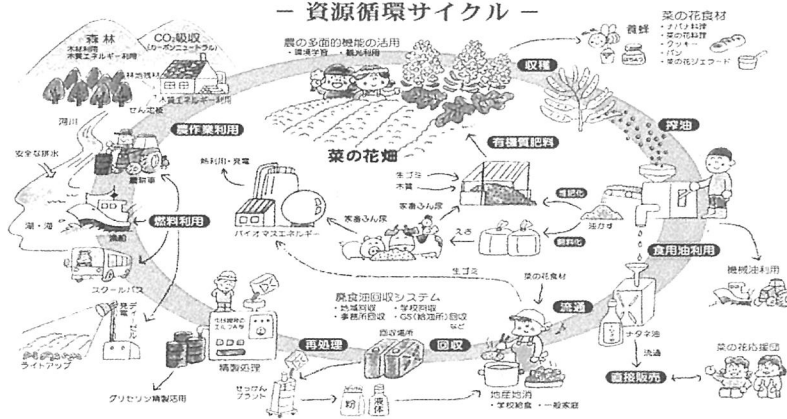
全国に広がった菜の花プロジェクトの拠点を指差して熱く説明する梅谷さん

菜の花プロジェクトとは、菜の花の種をまき、育て、花を愛で、菜の花畑で遊び、菜種を収穫し、油を絞る、食卓で使う。そして廃油を石炭や軽油代替燃料(BDF)にリサイクルし、絞るかすは農地へ還元するというもので、現在全国で約150の団体がこの運動に取り組み、全国の菜の花プロジェクトが一堂に集う「菜の花サミット」が開催されるなど、ほとんどの都道府県に広がっています。「菜の花サミット」は、来年は愛知県田原市で開催される予定です。

この活動には、資源循環型社会の地域モデル作りを広げ、地域主体の豊かな街づくりの推進をはかり、遊休地・休耕地の再生利用をすることにより、地域農業の活性化を目指すというコンセプトがあります。梅谷さんは、この事業を「祭り」に例えてお話をくだ

Yellow Revolution Hello! 菜の花プロジェクト

— 資源循環サイクル —



造工程を示して、消費者に品質とその仕組みを知ってもらうことで、地域経済にも良い影響を及ぼすと考えています。高度成長の間は道を作る企業は道を作るだけ、材料は材料を扱う業者と分業化され、専門化していました。今後は各企業が協調性を高め、製造からリサイクルまでトータルで収益が上がるように考えていく必要があると梅谷さんは考え、消費者、企業、農家などが参加できるNPOを立ち上げたそうです。

世界の共通理念

環境を何とかしなくてはいけないという理念は国内にとどまらず世界的なものとなっています。また、世界の国々で様々な取り組みが行われています。

自分のできることをできる範囲で仕上げていく。排出事業者、消費者それぞれ一人ひとりが責任をもって取り組んでいくことが大切だと思います。それが積み重なって大きな仕事になるのではないのでしょうか。この菜の花プロジェクトを通して、企業と個人の垣根なく資源循環型社会づくりに取り組んで行きたいと思っています。循環する一つひとつの場面のどこかで、誰でも気軽に関わることができる。そして環境や農業、食の問題を考え、具体的に暮らしを変えるきっかけとなり、参加することで広がる菜の花プロジェクトが日本中に、世界に広がりつつあります。

さいました。昔のお祭では、お金のある人はお金を、知恵のある人は知恵を、技術のある人は技術を出し、それができない人は神輿を担いだり、自分の農地で取れたものを持ち寄ったりして成り立っていました。一人ひとりができることで協力をし、地域のコミュニケーションを保っていたのです。今の世の中にもこの精神が大切なのではないかと感じた梅谷さんは、企業も消費者も参加できるNPOを立ち上げました。

安心、安全をアピール

残飯養豚を行っている時は、人が食べても差し支えないものを豚の餌として与えていました。安心安全な国産物をピックアップして飼料化する、もったいない精神が一番のきっかけだったそうです。

残飯というと、いろいろなものが一緒に入れた、産業廃棄物という印象ですが、各企業からは同じものが大量に廃棄されます。それをキッチンと分別・収集したらどうでしょうか。捨てるごみを分別すれば高品質の飼料や肥料になります。廃棄物ではなくなるのです。

しかし、それには排出事業者の協力が不可欠です。リサイクル、有効利用を目的として、元はいいものなのだから、分別すれば有効利用できるという発想です。また、消費者の意識改革も必要になります。そこで私どもの取り組みとして、製造業者が責任を持って取り組んでいる製造工程が明確で安全性の確保されたものを利用しているため、安心・安全な肥料を作ることができています。そのことを消費者の方々にもアピールしていかなくてはなりません。

廃棄物を出す側が安全を保障できる製



豊田・加茂菜の花プロジェクトは平成17年、内閣総理大臣を本部長とする「立ち上がる農村漁村」の認定証を受賞。政府関係者も多数視察に訪れた。